「画題」を通して理解する日本文化――画題受容拠点としての京都――

――「WEB版画題辞典」(仮称)構築のための総合的研究――

(プロジェクト代表)立命館大学文学部助教授　中本　大

研究代表者　中本　大(立命館大学)
共同研究者　信多純一(大阪大学名誉教授・神戸女子大学教授)・木村重圭(甲南女子大学)・
林進(大和文華館)・藤田真一(関西大学)・塩崎俊彦(神戸山手大学)
(以上、「画題辞典」推進班)

研究協力者　堀川貴司(国文学研究資料館)・北野良枝(東京藝術大学)・
住吉朋彦(慶應義塾大学斯道文庫)・綿田稔(東京国立文化財研究所)
小助川元太(国立呉工業高等専門学校)
(以上、『後素集』校本作製推進班)

研究内容要旨

「画題」にこめられた本邦文化相を辿ることが第一義。具体的には「画題」の全体像を知り、美術・文学を始めとする人文科学研究に直接資するのみならず、歴史・文学・美術等文化史的に必須の常識を得るための「教養書」をWEB上で公開することを目的とする。

1、研究計画

1－1、「画題」概念の確定→日本的なるもの、日本人の視点の独自性を解析するための糸口として。

1－2、「画題辞典」構築の諸条件

○規模……蘭画等を除く本邦近世以前の画題のすべてを収録する大辞典(「事典」の方が適当か)。

○対象……漢画・大和絵・風俗画・物語絵(含、説話・伝説・戯曲)・宗教画等。

○構成……五十音順。大項目・中項目・小項目。索引機能の充実。

○記事……画題・よみ・解説(出典・背景・絵柄・展開等)・有名作例・キーワード・関連項目・参考文献。記事字数には制限を設け、検索の便宜を図る。

○索引……画題・書名・キーワード・逆引き機能の充実。

○キーワード……人物・動植物・器物・姿態等「図像」に関するもの、また故事・説話・出典等「背景」に関する特徴的なもの数項目(項目数の上限は規定する)。

1－3、項目担当の執筆・入力

金井紫雲編『東洋画題総覧』をベースに作業。完成後の総項目を常に念頭に置きつつ、各自、担当分野の画題を選択。次に、現在参照可能な図像との照合を行う。その上で担当者は①画像番号②画題(よみ)③出典資料(体裁)④絵師⑤製作年代⑥図像キーワード(数個)⑦『東洋画題総覧』への採録の有無⑧展覧会図録・既刊資料・売立目録などから採した取画像を貼付したファイル名(JPG)⑨備考データの各項目を入力、A作成者B出典番号C画像番号を明記して、サーバーに保存、データを相互に参照、利用する。

→ファイルの作成にはファイルメーカーPRO6(FileMaker.Inc)を使用。

2、作業上の問題点

2－1、担当分野により、画題の確定にレベルの差異が生じること

→大中小各項目確定のための必然的試行錯誤。

「風景画・名所図→八景図（瀟湘八景）→近江八景・江戸八景」

2－2、画題意識を検討しやすい漢画（室町水墨画）系画題及び近世絵手本類の重点研究

○『後素集』（近世初頭・狩野一渓編）諸本の検討と校本の確定。巻三「羅漢祖師」まで終了。

○ 近世絵手本類の調査検討の実施。『国書総目録』（岩波書店）未掲載のものが多く蔵される関西大学総合図書館所蔵近世絵画資料及び、東京芸術大学・東京国立文化財研究所所蔵の「探幽縮図」・「常信縮図」を重点的に調査検討している。絵手本類については仲田勝之助著『絵本の研究』及び展覧会図録『近世日本絵画と画譜・絵手本展』（町田市立国際版画美術館）所載のデータを基準とする。

3、今後の展開及び研究方針

3－1、集積データの公開方法については、CD-ROMによる配布またはHPでの公開を模索。

3－2、図像公開に関わり、所蔵各機関へ配慮をどうするか。

3－3、学術利用に制限することの妥当性の検討。

3－4、「見立て」「判じ絵」「謎絵」の解析等、文学的・文化史的欲求をどのように満たしていくか。

〈参照1〉具体的な事典項目の入力例（草稿。この体裁から大・中・小各項目を確定）

竹林七賢

『東洋画題総覧』では次のように記される。すなわち、「支那魏晋交代の間に於て、国難を避け、竹林に会して清談を事としたる七人の隠士をいふ、曰く阮籍・嵇康・山涛・向秀・劉伶・王戎・阮咸（阮咸は阮籍の兄）此の中、独り山涛のみは後に竹林を出で、後晋の武帝に仕へて吏部尚書となり、選挙の事に與り、所謂山公啓事を遺した。竹林七賢を描いた名作

狩野元信筆	帝室御物
同	京都片山儀兵衛氏蔵
同	京都聚光院蔵
雪舟筆	浅野侯爵家蔵
雪村筆	原富太郎氏蔵
同	牧野子爵家蔵
狩野松栄筆	小笠原伯爵家蔵
狩野探幽筆	鍋倉直氏蔵
円山応挙筆	讃岐金比羅宮蔵」

戸田禎佑が「漢画系人物図屏風の輪郭」（『日本屏風絵集成　四　人物画　漢画系人物』・講談社・八一年）で記したように、本邦における画題「竹林七賢図」では七賢個々の描き分けにはほとんど執着することなく、七人の隠者と竹林を配することのみが主眼である、と一般的に考えられてきた。確かに、東博蔵伝元信筆「商山四皓・竹林七賢図屏風」を始め、特徴に乏しい作例が多いことは確かである。それは逆に画題「竹林七賢図」を確定することの困難さにも繋がっていることは、林進氏が論考「雪村筆「竹林七賢図」（畠山記念館所蔵）について」（前掲書所収）で述べられるとおりである。しかし近年、北野良枝氏により妙心寺塔頭天球院上間一の間に描かれた狩野山雪筆「七賢図」が、七賢個々の個性を尊重した描写であることが報告された（「國華」一二五三号）。氏の考究によると、山雪の構図は狩野一渓編の画題集成『後素集』巻第二・隠逸部所収「晋七賢図」の記述に一致するという。『後素集』の記述は以下の通りである。

晋七賢図

晋ノ嵇康伝、与康交者阮籍、山涛、向秀、劉伶、阮咸、王戎、為竹林ノ遊、所謂竹林七賢是也。（詩学大成有之）

嵇康字斉夜、好ヲトコナリ、琴ノ上手。

阮籍字嗣宗、弾琴、亦七月七日以竿拄大布犢鼻袴曝庭犢鼻ハ　ナリ、好男也

山涛字巨源

向秀字子期、伯牙琴ヲ聞タル人ナリ

劉伶字伯倫、常乗鹿車、愛酒
阮咸字仲容
王戎字濬仲、視日不睡、日向テマダゝキヲセストコト也。
此七賢内山涛ト王戎ハ意カワリシテ竹林ヲ去也、此後ハ残リ五人ヲ五君ト云也。

一渓は七人それぞれの字号を始め、関係する故事をも積極的に採録している。向秀の字を「子期」と記し、断琴の故事で著名な「鍾子期」と混同するような誤りはあるものの、こうした理解を踏まえ山雪は鹿車に乗る劉伶を描き、竹林から去る二人を描いていることを北野氏は指摘している。

実際、『後素集』の記述は「七賢」画題確定に関しても幾つかの問題を提起してくるのである。第一に末尾に記される「五君」についてである。常識的に考えて、「竹林七賢図」を認定する最大の根拠は「七人の人物」であろう。しかし、二人を欠く「五君」が七賢の変奏として認知され得ることを忘れてはならない。室町後期の禅僧、琴叔景趣の七絶「扇面七賢」には「此中真隠五君足、莫把三山一様看」とあるのを始め、季弘大叔の「題竹林七賢図」で顔延之の五君詩を引用することからも「五君」の概念は禅林においても定着していたことが確認されるのである。なお、七人の中、山涛のみが去ったとする『画題総覧』の記述が何に依拠しているかは不明である。画面に描かれる人数の問題をめぐっては『後素集』の記述以外にも留意しなければならない事例がある。林氏の論考で既に引用されている室町時代中期の禅僧、天隠龍沢の画賛「竹林七賢軸　旁布瀑布」(『翰林五鳳集』所収)を参照されたい。二幅対の一幅が奪われ、残された一幅を詠じた七絶である。

若道七賢言似誣　此中屈指四人無
飛流直下銀河水　認作廬山三笑図

その措辞から、画面に描かれた三人を七賢に見立てる経路が忖度されるのである。禅林にあっては、「商山四皓図」でも「四老惟三少一人」(希世霊彦「商山四皓図　惟有三人」)という構図が確認でき、人数や名数によってのみ画題を確定することの危険性と困難さを示すものともなっている。『後素集』では名数「七」にちなむものとして、「七賢」(伯夷・叔斉・虞仲・夷逸・朱張・少連・柳下恵、「晋七賢」の「隠」に対する「逸」)及び「七才子図」すなわち建安七子を挙げている。雪村筆「七隠士騎馬野遊図」等、七人の人物が配される野遊図は元来、「竹林七賢」の故事とは別の建安七子に由来したものと考えられる。しかし、これらの題材の混同は、林氏が指摘されるように、室町中期の禅僧、季弘大叔の当時、既に確認されるものであり、その整理は容易ではない。例えば、竹と人物を配した画題で「竹林七賢図」と混同しやすいものとして、『後素集』にも収められる「竹渓六逸図」が挙げられる。唐代、竹渓に集った李白を始めとする六人の酒友の故事に取材したもので、雪村筆や利光筆等、酒を酌み交わすような「竹林七賢図」の構図は、「竹渓六逸図」との混同、或いは援用の可能性も考えられるであろう。

現在、確認できる「竹林七賢図」は以下の通り。

①01②竹林七賢図③図録④襖絵⑤雲谷等顔⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩大徳寺黄梅院蔵・京博寄託
①02②竹林七賢図③屏風絵集成4④屏風⑤伝狩野元信⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩東博蔵・商山四皓図と一双
①03②竹林七賢図③屏風絵集成4④屏風⑤狩野探幽⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩静岡県立美術館蔵・香山九老図と一双
①04②竹林七賢図③國華④襖絵⑤狩野山雪⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩妙心寺天球院
①05②竹林七賢図③図録④軸⑤狩野秀頼⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩山口県立美術館
①06②竹林七賢図③屏風絵集成4④屏風⑤雪村⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩畠山記念館蔵
①07②竹林七賢図③図録④軸⑤利光⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩常盤山文庫・右幅のみ
①08②竹林七賢図③屏風絵集成4④屏風⑤啓孫⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩一隻・東博蔵
①09②竹林七賢図③屏風絵集成4④屏風⑤狩野常信⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩法然寺蔵
①10②竹林七賢図③屏風絵集成4④屏風⑤狩野安信⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩聖衆来迎寺蔵

・商山四皓図と一双
①11②竹林七賢図③屏風絵集成4④屏風⑤狩野安信⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩三時知恩寺蔵
・李白観瀑図と一双
①12②竹林七賢図③屏風絵集成4④屏風⑤長谷川等伯⑥⑦⑧竹林七賢594⑨⑩建仁寺両足院蔵

備考「竹林三老図」(雪村)・祥啓筆双幅(狩野家縮図)

〈参照2〉『後素集』聖賢部・本文校訂例

黄帝垂龍図
(国会A)鼎湖諫丹　給フ丹成テ復龍来テ　黄帝
(芸大本)鼎湖練丹ヲ給フ丹成テ後龍来テ　黄帝
(東博本)鼎湖諫丹　給フ丹成テ復龍来テ　黄帝
(京府本)鼎湖諫丹　給フ丹成テ後龍来テ　黄帝
(狩野A)鼎湖諫丹　給　丹成　後龍来　黄帝
(筑波本)鼎湖煉丹　給フ丹成テ後龍来テ　黄帝
(東大本)鼎湖練丹給ふ丹成て後龍来つて黄帝
(島原B)鼎湖練丹　給ふ丹成て後龍来つて黄帝
(島原A)鼎湖練丹　給ふ丹成て後龍来つて黄帝
(狩野B)鼎湖練丹　給ふ丹成て後龍来つて黄帝

(国会A)ヲノセテサル七十余人ノ臣下龍ノヒゲ
(芸大本)ヲ乗テ去ル七拾余人ノ臣下龍ノ髭
(東博本)ヲノセテサル七十余人ノ臣下龍ノヒゲ
(京府本)ヲ乗セテサル七十余人ノ臣下龍ノヒゲ
(狩野A)ノセテサル七十余人ノ臣下龍ノヒゲ
(筑波本)ヲ乗　テ去ル七拾余人ノ臣下龍ノ髭
(東大本)を乗　て去　七十余人の臣下龍の髭
(島原B)を乗　て去　七十余人の臣下龍の髭
(島原A)帝を乗　て去　七十余人の臣下龍の髭
(狩野B)を乗　て去　七十余人の臣下龍の鬚

(国会A)ニトリ付　昇　レ共　ヲチテ　上　事
(芸大本)ニ取付　昇　レトモ髭　ヌケテ登　ルコト
(東博本)ニトリツキ昇　レトモヒケヌケテノホルコト
(京府本)ニ取付　ノボレトモヒケヌケテ昇　ル事
(狩野A)ニトリツキ昇　レトモヒケヌケテノホルコト
(筑波本)ニ取付　昇　レトモヒケヌケテ昇　ル事
(東大本)に取付　昇　れともひけ切　て
(島原B)に取付　昇　れともひけ切　て
(島原A)に取付　昇　れともひけ　て
(狩野B)に取付　昇　れともひけ　て

(国会A)ヲ不得
(芸大本)ヲ不得
(東博本)ヲ不得
(京府本)ヲ不得
(狩野A)ヲ不得
(筑波本)ヲ不得也
(東大本)不得昇
(島原B)不得昇
(島原A)不得昇
(狩野B)不得昇